巻頭インタビュー

中部圏はビッグバンドの聖地だ！

1978年、第10回合歓ジャズインに主演したジャズ・ラブ・オーケストラ（P20）。中央が森さん。観客動員6700人

シャープス&フラッツのリーダー原信夫さん（1926-2021）と

ジャズ・ラブ・オーケストラ結成10周年特別リサイタル（1980）

あいちトリエンナーレ2013「ジャズ・ラブ・オーケストラと素敵な仲間達」では、結成当時のメンバーに加えて八神純子、向井滋春らゆかりのミュージシャンも多数出演した　※DVDプレゼントあり。詳細はP99で！

50年以上も昔から、
中部地方はビッグバンドが盛んな土地柄と言われています。
当地のビッグバンド界をリードし続けてきた森庸全さん
（元 JAZZ LAB ORCHESTRA（ジャズ・ラブ・オーケストラ） リーダー）に、
半世紀にわたる足跡を振り返っていただきました。

（聞き手／野瀬憲康）

セントレア空港音楽祭 総合プロデューサー
株式会社イントロダクション 代表取締役 **森（もり） 庸全（かねまさ）** さん

セントレア空港音楽祭 総合プロデューサー
株式会社イントロダクション 代表取締役
森（もり） 庸全（かねまさ） さん

1947年、犬山市生まれ。愛知学院大学スィンギング・オールスターズのリーダーとしてヤマハライトミュージックコンテストでグランプリを受賞。69年、ヤマハに入社。ポプコン中部地区の初代プロデューサーとして高木麻早、八神純子、あみん、雅夢らを発掘。愛院大のOBを中心に結成された社会人バンド「ジャズ・ラブ・オーケストラ」では名古屋市芸術奨励賞、愛知県芸術文化選奨文化賞を受賞した。
89年に独立し、数多くの音楽イベントをプロデュース。現在は年間を通じてさまざまな音楽が楽しめる「セントレア空港音楽祭」総合プロデューサーを務める。
http://www.introduction.co.jp/

愛院大が地域をけん引

――「野球が強い高校は吹奏楽も上手い」と言われますが、高校野球が盛んな中部地方ゆえにアンサンブルに長けた管楽器奏者が多い、そのことが「この地域のビッグバンドの隆盛を下支えしている」ということはあるのでしょうか？

森 それはちょっと分かりませんが、全国に校名を知らしめる手段として「野球ありき」というのはありますよね。実際、私の母校の東邦高校の吹奏楽部は野球部の応援部隊として甲子園に。愛知学院大学のスィンギング・オールスターズ（1955年創部／以下スイング）も、当時は「応援団の附属」という位置づけでしたから。

私は、犬山中学で中日吹奏楽コンクール3年連続優勝。東邦高校に特待生としてスカウトされ、2年生の時に吹奏楽コンクールで全国優勝。今度は愛知学院の特待生ということでスイングに所属。つまり高校・大学の7年間、一度も学費を払っていないんです（笑）。

――そうすると、スイングは「学生ビッグバンドの名門」「名古屋の雄」と言われますが、森さんは自ら望んで「ジャズを演ろう」というわけではなかったのですか？

森 興味はありましたね。ビッグバンドとは何ぞやと。当時はグレン・ミラー、あとペレス・プラードなどのラテン系が多かったかな。

日本では、シャープス&フラッツとかブルーコーツとかニューハードとか、そういうビッグバンドがもてはやされるようになってきた時代。と言っても、歌手の全国

巻頭インタビュー

中部圏はビッグバンドの聖地だ！

ツアーや歌謡番組などで伴奏する、あくまでも黒子でしたが。

――ビッグバンドを抱えているダンスホールも多かったそうですね。

森 ですから、この地域にも優秀なビッグバンドがいっぱいありましたよ。愛知学院、愛知大学、名城大学、名古屋大学、中京大学、愛工大…。大学だけでも10バンドぐらいあったかな。

その中で競い合い、そしてヤマハのライトミュージックコンテスト（渋谷公会堂）に出場し、全国の1万を超えるバンドの中からスイングがグランプリを取った。そこには当然、藤崎邦夫さん（現・作編曲家）という、スイングの先輩の力も大きかった。

藤崎さんがニューハードに在籍していて、アレンジもされていた。いろんなアレンジをされている中に、当時先端だったウディ・ハーマンの「Woody's Whistle」などがあって、そういう東京のプロでさえあまり演っていないような曲をスイングが演ったわけです。

▲森さんのグランプリ受賞から9年後の1978年、スイングがレコーディングした1stアルバム（キングレコード）。学生離れしたテクニックとOB藤崎邦夫さんのアレンジが光る名演ぞろい。「水底の都」は藤崎さんのオリジナル

猛練習で栄冠に導く

――1万超のビッグバンドがコンテストに出場したんですか？

森 いやいや。ライトミュージック（軽音楽）というのはヤマハの造語で、クラシック以外は全部OKという意味（笑）。ビッグバンドはその一ジャンルで、フォークありラテンあり民族音楽あり、そんな1万以上ものバンドが予選で競い合い、コンテストには各地区代表の30バンドが出場しました。

ビッグバンドは東京6大学、あとは関西からも4、5バンド出ていたかな。中でも早稲田のハイソサエティ・オーケストラは群を抜いていました。

「追いつけ追い越せ」で、志賀高原で合宿をやった時は「普通の練習量じゃダメだぞ」「プロの連中がビックリするようなことをやらないと早稲田には勝てないぞ」なんて言っていたら、最初の2日間で口に肉刺（まめ）ができてどうのこうのと言うから「それを乗り越えないとダメなんだ！」ということで、

私も夜に独りで練習していたら誰よりも先に唇を切ってしまったり。そういうのを見て後輩たちも「頑張ろう！」ということにつながったんじゃないかな。

――その時はどのような練習を？

森 まず唇を鍛える。ロングトーンで音階をやったり、ハイノート（高音域）でロングトーンをさせるとか、それをとことんやった。あとはピッチ（音程）ね。初心者はどうしてもフラット（音程が下がり気味）になるから少し上に行くぐらいのね、それにはやはりリップ（唇）だから。あとタンギング。人様が2時間とか6時間はやった。

次に考えたのは、ちょうどテープレコーダーが出てきた頃で、それで例えば「Woody's Whistle」を4小節単位で流す。終わったら同じ4小節をそっくりそのまま

▲ライトミュージックコンテストの模様を伝える平凡パンチの誌面（1968年11月）。その演奏はゲストのプロ奏者たちも驚かせた。左は森さんの同級生・森部民也さん（故人）。卒業後は星城高校ブラスバンド部の顧問としてジャズの魅力を伝え続けた

「サックス・セクション吹いてみろ。次はトロンボーンだぞ」と全パートで演奏・録音して、自分たちで聴き比べる。音のバランスや吹き方など、プロとの違いを聴き比べる。そして「サックスの録音を聴いて、トロンボーンやトランペットも意見を言っていいよ」と。みんなで聴き合って言い合えるという練習方法を取ったんだね。

これは、時間はかかるけど中身は濃いですよ。ロングトーンと音階でピシッと基礎をやって、パート単位でフレーズを聴き比べる。そうすると、サウンドがみるみる変わってくるんですよ。

渡辺貞夫さんが絶賛した浅井憲二君（のちジャス・ラブ二代目リーダー）のハイノートも、この合宿で磨かれました。

――志賀高原の合宿で「学生ビッグバンドの名門」スイングの礎が築かれたんですね。そして、地元の他大学も「スイングに追いつけ追い越せ」と。

森 そういうことですよね。

プロも驚く社会人バンド

――森さんは、大学卒業後の71年に社会人ビッグバンド「ジャズ・

巻頭インタビュー

中部圏はビッグバンドの聖地だ！

ラブ・オーケストラ（JAZZ LAB ORCHESTRA）」を結成しますね。

森 やはり、中学生の頃から管楽器主体のアンサンブルに携わってきたことを捨てきれないというかね。それと、シャープス&フラッツとかをテレビで見たりすると血が騒ぐというのかな。「自分にとって音楽の到達点はここ（ビッグバンド）なんだ。じゃあ社会人バンドを作ろう」というのが、大学を卒業した直後に思ったことです。

せっかく全国大会に出て、大橋巨泉や小島正雄さんが「名古屋、中部はビッグバンドのメッカ（聖地）なんだね」とまで言ってくれた。「じゃあその先兵となる社会人バンドを」という時に、ヤマハに入社したことは非常に大きかった。

ヤマハジャズクラブというのを内田修先生が長年やっていて、そこには渡辺貞夫さん、佐藤允彦さん、山下洋輔さん、日野皓正さんをはじめ、毎回トップのジャズメンが集まっていた。私がヤマハ名古屋店で担当していた頃は、終わってからみんなで一杯飲みに行くんだ。そういう人脈というのは、よその社会人バンドのリーダーではできなかったと思いますよ。

▲ジャズ評論家・内田修さん（1929-2016）。病院経営の傍ら多くのジャズ・ミュージシャンをサポートしたことからドクター・ジャズの愛称で親しまれた。膨大なコレクションは岡崎市図書館交流プラザ（岡崎市東康通西・71）りぶら2階「内田修ジャズコレクション展示室」で公開されている。https://dr-jazz.jp/

――「LOVE（愛）」「LABORATORY（実験・研究）」の意味を持たせた「ジャズ・ラブ・オーケストラ」という命名も内田先生だそうですね。

森 ええ。69年に入社し、同年ヤマハ・リハーサルバンドというのを作りました。翌年内田先生と接点ができ、バンドの顧問になっていただき、70年の暮れから71年にかけて、ヤマハホールに先生を呼んで結成記念コンサートをやって…というところから始まって、メンバーもどんどん変遷していくんですけど、普通の社会人バンドでは経験できないようなことをたくさん経験させていただきましたよ。

――そうした幅広い活動も「ジャズ・ラブに追いつけ追い越せ」と、この地域のビッグバンドの隆盛につながっているように思います。

森 ベニー・カーターやギル・エバンスの客演もやったし、シャー

▲1978年、第10回合歓ジャズインでは向井滋春、山下洋輔、渡辺香津美、マリオン・ブラウン、酒井俊、渡辺貞夫に続いてトリでジャズ・ラブ・オーケストラが出演。会場ではジャズ・ラブの演奏に合わせて踊る山下洋輔らの姿も見られた

プス&フラッツとは何回も一緒にやったしね。「ジャズ・ラブってすごいね」というのは、当時から話題ではあったみたいですね。

ほかに共演したのは松本英彦、向井滋春、伊藤君子、八神純子、近藤房之助、ケイコ・リー、寺井尚子、川口千里、名フィル…。2013年には活動の集大成として、あいちトリエンナーレ「ジャズ・ラブ・オーケストラと素敵な仲間達」も開催しました（P15写真）。

つまり、刺激を求めて積み上げていくというか。それは、長年続けていく上で絶対必要だと思うね。

――名古屋の老舗ビッグバンド「レアサウンズ・ジャズオーケストラ」も頑張っています。

森 レア・サウンズは西川（政夫）ちゃんが74年に作ったバンドで、彼は亡くなってしまったんだけど、二代目リーダーの井上洋介君（スイングOB）が海外からゲストを呼んだり、海外に演奏旅行に行ったり、それはそれでなかなかできないことで、立派だと思いますね。

アマチュア・ビッグバンドの祭典「Be Happy Jazz Festival」も西川ちゃんが考えたんですよ。私のところにもちょくちょく遊びに来ていて、当時私はヤマハビッグバンドフェスティバルというのを名古屋店でやっていたんですけど、それらを参考にフェスを作ったと西川ちゃんは言っていたな。だからあれは、今から50何年も前に私と西川ちゃんが話し合ったのが発端。と言っても、今の学生たちなんて孫ぐらいの年齢ですからね、そりゃあ知りませんよ（笑）。

セントレア空港音楽祭で後進たちに発表の場を

――近年のビッグバンドの印象はいかがですか？

森 吹奏楽もそうですが、昨日今日流行った曲がすぐ楽譜になっている。そういう点では便利な時代。であるがゆえに、同じような楽譜ばかり演っていると、どこもかしこも同じサウンドになってくる。

最初は真似から入るのでそれはそれでいいんだけど、ある時を超

巻頭インタビュー

中部圏はビッグバンドの聖地だ！

▲セントレア・クール・ジャズ・フェスティバル（特別協賛／サポーレ）
7月1日（土）、2日（日）に中部国際空港セントレア第1ターミナル4階イベントプラザで開催。観覧無料。未就学児鑑賞可。※写真は過去の様子

えたらオリジナリティのあるサウンドを志向するのもありかな。

あと、東邦のマーチングバンドでも今は8割から9割が女性なんだね。スイングも女性の比率が多くなっている。いいことではあるけれども、そもそも男性と女性とでは持っている音量、パワーが違うんじゃないかなと。体力的にね。

――つまり「編成や力量に合わせて選曲を。そのバンドならではのサウンドを」ということですね。

森 メンバーの誰かが曲を書くとか、編曲するとか。ジャズ・ラブでは、藤崎さんをはじめ前田憲男、佐藤允彦、秋吉敏子、鈴木宏昌、岩間雅彦、上田力の各氏に編曲を依頼したり、小川良和らのメンバーが編曲したりしていました。そういう「オリジナルの音色・楽曲を作る」というのが理想だよね。

――森さんは、現在「セントレア空港音楽祭」の総合プロデュースをされていますね。

森 ジャズ・ラブは数年前に愛大ブルスタOBの大林信夫君に任せて、今は「セントレア空港音楽祭」に全力投球です。

オールジャンル。そんな音楽イベントは世界にありませんよ。しかもセントレアは、イベントプラザだけで年間1235万人。テーマパークとしては長島温泉の次にお客さんが来ているんです。

7月1日、2日に開催される「クール・ジャズ・フェスティバル」も、今やビッグバンドだけで20バンド以上。であればあと数日増やしてビッグバンド・フェスにして、1日だけコンボ（少人数編成のジャズバンド）にしようとかね、どんどん広がっていくんですよ。

主催者の中部国際空港さん、出演者の皆さん、イベントを支えて下さっているヤマハグループとサポーレさんには感謝しかありませんね。

――「中部地方はビッグバンドのメッカ」と言われたその灯を消さないためにも、愛知・岐阜・三重で活動するビッグバンドにはますます頑張っていただき、クール・ジャズ・フェスティバルで腕を磨いていってもらいたいですね。

今日はありがとうございました。